

悠久の京を訪ねて PartⅢ Vol.3



京は古より人々が集い、その気候・風土の中、人々の生活が営まれてきました。

京都府内の遺跡で多数発掘された出土品により、縄文・弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。

私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのか、出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

古代寺院の実態が明らかに —八幡市美濃山廃寺の発掘調査から—

■古代寺院の寺域全域を発掘調査

竹林が広がる八幡市の美濃山丘陵には、古くから古代瓦の散布地が知られていました。「古寺」の地名もみられることから「美濃山廃寺」として周知されてきました。10年ほど前、八幡市教育委員会が5カ年にわたる発掘調査を実施し、寺域(寺院の敷地)がほぼ明らかになりました。

昨年度には寺域のほぼ全域を調査し、寺院の全容が判明しました。南山城地域における古代寺院の調査は木津川市高麗寺跡や山城国分寺跡など10数カ所で実施されていますが、寺域の全体が調査された例はほとんどありません。



美濃山廃寺調査地の全景

■多様な仏教関連遺物

調査では、7世紀後半から9世紀前半にかけての多数の遺構が見つかりました。寺域中央では、古代寺院には類例のない掘立柱と礎石を併用した特殊な構造の大形建物、北側では多数の倉庫群、南側からは、瓦窯や鉄器や青銅器を生産した炉などが検出されました。しかし、建物には塔や金堂などに比定できるものはなく、主要な古代寺院のような伽藍配置は認められませんでした。

出土遺物には、鬼瓦・鴟尾などの瓦類、当時の貴重品である三彩陶器、日常の食器として使用された土器類のほか、埴伝をはじめとする仏教関連遺物がみられます。特徴的なものとして、奈良時代にはほとんど出土例のない仏具で土製の小塔と考えられる覆鉢形土製品が30点以上も出土しています。この土製品は、最新の仏教情報を基に作り出されたものとも言われています。美濃山廃寺の調査から古代寺院の一様相をうかがい知ることができました。



覆鉢形土製品